4. SUIJIジョイント・プログラム・マスター／ドクター

修士課程の共同教育プログラムのモデルを提示できたのか？

愛媛大学大学院　農学研究科長　杉森　正敏

「大学の世界展開力強化事業」の最終報告にあたり、SUIJIの修士課程共同教育プログラムについて私見を述べる。

事業採択に際して、日本とインドネシアの６大学コンソーシアムで修士課程の国際共同学位を目指すこととなった。そのため、当初はSUIJIジョイントディグリー・プログラムと称していた。しかし、平成26年11月に文部科学省「我が国の大学と外国の大学間におけるジョイント･ディグリー及びダブル･ディグリー等国際共同学位プログラム構築に関するガイドライン」が発表され、国際連携教育課程（JDプログラム）が制度化されたことを受け、本事業では国際共同学位化の方針を転換し、二国間共同教育に主眼を置くこととなった。

方針転換は致し方ないにしても、「大学の世界展開力強化事業」として他研究科の範となる教育プログラムのモデルを提示できたのか？ ガイドラインがあるだけで、アドミッションポリシー・ディプロマポリシー・カリキュラムポリシーがない。もちろん、学生自身の努力と受け入れ教員個々のご尽力によって教育成果を上げてきたことは間違いない。しかし、プログラムとしての完成度は十分とは言えない。したがって、今後は、日本側３大学に設置しているアジア・アフリカ・パンパシフィック留学生特別コースの正規留学生として受け入れることも視野に入れて日本・インドネシア６大学の教育・研究のさらなる交流に努めていきたい。

「グローカル」人材育成とSUIJI事業

香川大学大学院　農学研究科長　片岡　郁雄

５カ年にわたるSUIJI事業が、円滑に行われ多くの交流実績をあげることができたことは誠に喜ばしく、ご尽力いただいた多くの方々に、労いと感謝の意を表したい。この間、これほど多数の学生の相互派遣を無事に実施し、またコンソーシアム６大学の連携を深めることができたのは、関係者の周到な準備と深い配慮によるものに他ならない。

サービスラーニングプログラムやジョイントプログラムに参加し、当地に滞在したインドネシアからの留学生は、地域の人々との交流を通じて、大都市とは異なる地方の文化伝統や生活に直接触れ，真の日本を感じ取ったことと思う。現地サイトで、あるいは研究室で、インドネシアからの留学生と生活を共にした日本学生も大いに刺激を受けた。彼らにとって、世界に目を向け、日本を振り返るきっかけとなったであろうし、海外にできた親しい友人の存在は、世界をより身近なものと実感したに違いない。この経験は、彼らのこれからの進路や生活に大いに活かされるものと確信する。

SUIJI事業を通じて培った６大学の信頼関係をもとに、それぞれの大学や立地する地域の特色を踏まえた教育や研究の交流がさらに進展することを願って止まない。

SUIJIでの学びを将来に活かして

高知大学大学院　総合人間自然科学研究科　農学専攻長　尾形　凡生

高知大学では、本学より平成25年度に２名、平成26年度に１名の学生をインドネシアへ派遣し、平成27年度に３名、平成28年度には３名の修士課程と１名の博士課程のインドネシア学生を受け入れている。

本スキームが立ち上がって間もない頃の派遣学生は、制度がまだ十分に整備されていなかったり、慣れない外国語でのやり取りで苦労したりした面も多々あったようだ。現地ではフィールドワークが中心の活動で、限られた時間の中、最大限の成果を上げるべく努力と研鑽を積んだ。

本学に留学してくるインドネシア学生は、インドネシア側３大学から１名ずつ留学している。平成28年度からは博士課程の学生も１名留学中である。インドネシア学生は修士課程２年生ということもあり、本学へ留学してくる時には修士論文の構想はほぼ描かれており、本学では実験・分析を中心に研究活動を行っている。高知での生活は学内や南国市国際交流協会さん主催のイベントに参加したり、県内の他大学に留学中のインドネシア学生との交流も盛んに行われたりしている。

５ヵ年にわたるSUIJI事業の第一段階を終え、ご尽力いただいた皆さまに御礼を申し上げたい。今後の展望としては、大学院生の学術誌等への投稿を促し成果を可視化することや学会発表に加え、研究者間による共同研究・学術研究について具体的な提案をしていく必要があるだろう。引き続き、愛媛大学、香川大学の農学研究科ならびに愛媛大学連合農学研究科との連携強化に努めていきたい。

SUIJI事業で得たものを礎としてさらなる前進を

愛媛大学大学院　連合農学研究科長　橘　　燦郎

SUIJI事業の中で、平成27年にSUIJI６大学間で博士課程の共同教育プログラムに関する覚書が締結され、これに基づき連合農学研究科では、SUIJIジョイント・プログラム・ドクターコースを同年に設置した。このプログラムはSUIJI事業が学部学生から修士課程学生、博士課程学生へと連携した広がりをみせた１つの集大成プログラムであり、２国間６連携大学の学生の教育・研究を推進してきた大きな成果であり大変意義深いものである。平成28年度からは、インドネシア３大学の博士課程の学生３名を１年間日本の３大学に受け入れて教育研究を行っている。このプログラムにより、学生は１国の大学だけでなく２国間で教育研究ができるようになった。学生にとっては、他国で教育研究の指導が受けられることにより、より広い視野で物事を思考する力や国際的な視点での考え方が身につけられるだけでなく、相互に充実した研究指導を受けることができる。このことはこのプログラムに参加する学生だけでなくSUIJIプログラムに参加している全ての学生に及ぼす教育研究効果は非常に大きいものと思慮される。

これまで多くの学生がSUIJI事業の中で教育を受け育ってきたが、これができたのも関係者の不断の努力があったことは言うまでもない。しかし、それだけではなく、支援していただいた多くの人々がいたことも忘れてはならない。

SUIJI事業がさらに発展し、教育研究連携がさらに活性化され、将来６大学間でダブルディグリープログラムが実施されることを期待している。

■SUIJIジョイント・プログラム実施の経緯

当時日本では、文部科学省中央教育審議会の中に平成20年９月に設置された第５期・大学分科会において、大学教育の質保証・向上の観点から、我が国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等につながるプログラムのあり方について検討が開始され、平成22年５月に「我が国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等、組織的・継続的な教育連携関係の構築に関するガイドライン」が公表され、日本の大学と外国の大学間の組織的・継続的な教育連携関係を促進する機運が高まっていた（文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育の検討に関する作業部会大学グローバル化検討ワーキンググループ、平成22年５月）。当該ガイドラインでは、ジョイント・ディグリー・プログラムについて、「我が国と外国の大学が、教育課程を共同で編成・実施し、単位互換を活用することにより、双方の大学がそれぞれ学位を授与するプログラム」と定義した。平成21年時点で、ダブル・ディグリーについては国内93大学で302の協定が締結されていた一方で、ジョイント・ディグリーについてはわずか５協定しか締結されていなかった（文部科学省高等教育局（2011年）：大学における教育内容等の改革状況について（平成21年度）、大学資料（192）、P. 30－77）。

SUIJIコンソーシアムでは、当時国内ではまだ数少ないジョイント・ディグリー・プログラムが、コンソーシアム構成大学間の強固な連携のもとで展開する事業として最適な形態であると判断した。平成23年９月に修士課程学生を対象としたSUIJIジョイント・ディグリー・プログラム・マスター（SUIJI-JDP-Ms）に関する覚書を締結し、平成26年９月には博士課程学生を対象としたSUIJIジョイント・ディグリー・プログラム・ドクター（SUIJI-JDP-Dc）に関する覚書を締結し、修士課程から博士課程に至るまでの多層的な大学院共同教育プログラムを構築するに至った。SUIJIジョイント・ディグリー・プログラム（SUIJI-JDP）は、SUIJIコンソーシアム構成大学の大学院修士、博士課程に在籍するSUIJI-JP履修学生が、受入大学で実施される共同教育プログラムの単位を修得したうえで、在籍大学が定めた修了要件を満たし、在籍大学と受入大学の共同による研究指導の下で修士論文を作成することにより、大学院修士課程、博士課程のSUIJI-JDPの修了をSUIJIコンソーシアムが認定するプログラムとして定め、SUIJIコンソーシアムの事業として開始した。

文部科学省中央教育審議会大学分科会は、平成23年度から引き続きジョイント・ディグリー（JD）のあり方について検討を進め、平成26年11月に「我が国の大学と外国の大学間におけるジョイント・ディグリー及びダブル・ディグリー等国際共同学位プログラム構築に関するガイドライン」を定めた。同時に、文部科学省は大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について（通知）（平成26年11月14日付け26文科高621号）等において、JDであって一定条件をクリアしたものについては、我が国の大学が授与する学位記に連携する外国の大学が連名することができる旨の運用上の取扱いの変更を示すことにより、両者の連名の形式での学位授与を公的に認めることとなった。この文部科学省JD制度では、連携大学間で協定を締結することを必須とし、大学に国際連携教育課程（国際連携教育課程制度に基づき我が国の大学と外国の大学が共同で編成する教育課程）を実施するための国際連携学科・専攻の設置を義務づけた。さらに、本JD制度では、大学院卒業要件の最低修得単位数30以上のうち、15単位以上を日本で、10単位以上を各連携外国大学（単位互換）で、５単位以下を共同開設科目（単位互換の半分）でカリキュラムを構成することと定めた。

SUIJIコンソーシアムでは、文部科学省によるJD制度の設置を受けて、名称上の混乱を回避するため、平成28年度９月に、SUIJI-JDP-Msの覚書の更新と合わせて、修士課程、博士課程双方のプログラム名称をSUIJI-JP（SUIJIジョイント・プログラム）と改めた。

■プログラムの概要

修士課程、博士課程におけるSUIJI-JP共同教育プログラムは、SUIJIコンソーシアムを構成する各大学と愛媛大学連合農学研究科が定めるプログラム・ガイドラインに記された科目により構成される。SUIJI-JP履修学生は、受入大学で修得した共同教育プログラムの単位を在籍大学に持ち帰り、履修科目として単位認定を受ける。

修士課程においては、平成24年度からSUIJIジョイント・ディグリー・マスター・プログラム（SUIJI-JDP-Ms）として本格実施した。SUIJIコンソーシアムの申し合わせに沿って、６大学ごとにプログラムガイドラインを策定した。ガイドラインには、認定単位あたりの授業時間数、開講法形式、講義内容について定め、単位の相互認定の方法についても明記し、各大学の成績管理を実施する会議で単位の認定を行うしくみを確立した。

SUIJI-JDP履修学生は、原則として、入学後の半年から１年間を在籍大学での履修に、次の半年から１年間を受入大学での履修（共同教育プログラムを含む）に、そして残りの期間を在籍大学での履修にそれぞれあてる。学生の派遣・受入れにあたっては、日本の大学とインドネシアの大学のアカデミック・カレンダーに配慮し、行い修士課程、博士課程それぞれについて、SUIJIコンソーシアムで合意した派遣・受入れスケジュールを定めている。

参加学生は、留学意志と研究計画が明確であり、一定の成績基準と語学基準を満たしていることを条件として選抜した。学生向けのガイダンスでは、インドネシアの現地事情、危機管理体制、予防接種、ビザ取得手続き等に関する情報を周知し、英語力向上のためのサポートと合わせてインドネシア語の基礎会話講習（日本からの派遣学生向け）を行った。

参加学生は、６大学の受入れ指導教員の氏名と専門分野が記された「受入れ指導教員リスト」を参考に受入れ希望教員を指名し、各大学のSUIJI推進室が参加学生と受入れ指導教員のマッチングをコーディネートした。６大学のSUIJI推進室は、マッチング結果の承認を行ったあと、受入れ・派遣に必要な各種事務手続きを共同で行った。

〈SUIJI-JP-Ms派遣スケジュール〉

４月：プログラム学生の募集・ガイダンス → ５月：学生の選考（日本３大学内の調整含む）→ ６月：インドネシア側大学への受入れ指導教員とのマッチング・選考依頼 → ７月：プログラム学生への選考結果周知・派遣準備 → ８月中旬：派遣・プログラムの開始→半年から１年インドネシア側大学に滞在

※インドネシア側大学修士課程の学期は８月下旬～12月下旬、２月～６月の２学期制

〈SUIJI-JP-Ms受入れスケジュール〉

９月：プログラム学生の募集・ガイダンス → 10月：学生の選考 → 11月：日本側大学への受入れ指導教員とのマッチング・選考依頼 → 12月：プログラム学生への選考結果周知・派遣準備 → ３月中旬：受入れ・プログラムの開始→半年から１年日本側大学に滞在

〈SUIJI-JP-Dc派遣スケジュール〉
４月／９月：プログラム学生の募集・ガイダンス → ７月／１月：学生の選考（日本３大学内の調整含む）→ ８月／２月：インドネシア側大学への受入れ指導教員とのマッチング・選考依頼 → ９月／３月：プログラム学生への選考結果周知・派遣準備 → １月／８月：派遣・プログラムの開始→１年インドネシア側大学に滞在

〈SUIJI-JP-Dc受入れスケジュール〉
９月：プログラム学生の募集・ガイダンス → ４月：学生の選考 → ５月：日本側大学への受入れ指導教員とのマッチング・選考依頼 → ６月：プログラム学生への選考結果周知・派遣準備 → ９月：受入れ・プログラムの開始 → １年日本側大学に滞在

■プログラムの成果

〈交流人数〉

修士課程の SUIJIジョイント・プログラム・マスターのプログラムでは、日本３大学で受入れた学生総数は45名、日本３大学から派遣した学生総数は21名を数えた。インドネシア側では、プログラムへの参加を希望する学生は非常に多く、学業成績等に基づく選考を通過した学生が参加している状況である。ただし、希望学生が多くても、プログラム参加予定学生が希望する研究内容と受入れ側の指導教員との研究内容を照合する過程で、マッチングが成立しないケースがたびたび生じている。日本から派遣する学生については、事業期間を通じて希望者少ない傾向にあった。要因としては、大学院進学学生数が少ないなかで、そもそも海外に留学することを考慮していない学生が多いことや、修士課程の一時期を海外で費やすことが就職活動に支障をきたすと考えている学生が多いことがあげられる。一方では海外に留学を考える学生もいるが、経済的状況をはじめ、語学水準を含め異文化の中で就学活動を続けられるかなどの不安や、留学手続きのなどの煩雑さを懸念して留学を躊躇している学生も少なからずいる。このような学生については、大学の支援が受けられるSUIJI共同教育プログラムが受入れ間口として機能している。

大学ごとに受入れ・派遣実績数に偏りが見られることの要因としては、プログラム参加学生が希望する研究テーマが特定の研究内容に集中してきたこと、さらにプログラム学生の指導教員が相手国受入れ指導教員と共同研究を行っておりその在籍学生がプログラムに参加する傾向があることなどがあげられる。

平成24年から平成28年度のSUIJI-JP-Ms交流学生数

【受入れ】			平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	合計
受入れ大学		計画人数	9	9	12	12	14	56
	実績	実績人数	**5**	**6**	**12**	**12**	**10**	**45**
		愛媛	5	4	4	5	6	24
		香川	0	2	5	4	3	14
		高知	0	0	3	3	1	7
派遣大学		ガジャマダ大学	2	2	4	4	4	16
		ボゴール農業大学	1	2	4	4	4	15
		ハサヌディン大学	2	2	4	4	2	14

【受入れ】			平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	合計
派遣大学		計画人数	6	6	7	10	14	43
	実績	実績人数	**2**	**8**	**5**	**3**	**3**	**21**
		愛媛	2	5	1	1	3	12
		香川	0	1	3	2	0	6
		高知	0	2	1	0	0	3
受入れ大学		ガジャマダ大学	1	1	1	1	2	6
		ボゴール農業大学	1	6	4	2	1	14
		ハサヌディン大学	0	1	0	0	0	1

〈プログラム内容〉

共同教育プログラムの内容は、共通基準に即した内容としながら、各大学の専門分野の特色を反映して構成している。日本側3大学の修士課程の共同教育プログラムと、愛媛大学連合農学研究科の共同教育プログラムは以下の通りである。

SUIJIジョイント・プログラム・マスター（SUIJI-JP-Ms）共同教育プログラム
（愛媛大学大学院農学研究科ガイドラインより）

科目区分	科目名	必修／選択	単位数	備考
専門科目	Tropical agriculture （熱帯農学）	必修	1.5単位	
	Food security and community service （食料安全保障と地域貢献）	必修	1.5単位	
	Special seminar （特別演習）	必修	1単位	
	Field research （フィールド･リサーチ）	選択必修	1単位	2科目から1単位を修得する。
	Special experiment （特別実験）	選択必修	1単位	
	Special subjects （専門科目）	選択必修	3単位以上	3科目3単位以上を修得する。
修了要件単位			8単位以上	

SUIJIジョイント・プログラム・ドクター（SUIJI-JP-Dc）共同教育プログラム
（愛媛大学大学院連合農学研究科ガイドラインより）

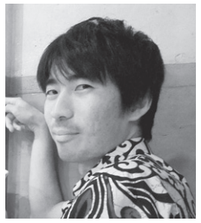
科目名	必修／選択	単位数	備考
Dissertation tutorial （学位論文演習）	必修	1単位	受入大学別 共同教育科目リスト参照
Seminar （各専攻セミナー）	必修	1単位	受入大学別 共同教育科目リスト参照
Comprehensive agricultural science Ⅱ （総合農学概論Ⅱ）	選択	1単位	受入大学別 共同教育科目リスト参照
共同教育プログラム修了要件単位		2単位以上	

修士課程プログラムにおいて、日本３大学で共同開講する必修科目については、各大学の多様な研究分野と特性を活かし、学生の俯瞰力を養うとともに実施担当教員で協議をしながら、評価を行っている。修士課程、博士課程ともに、６大学ごとにガイドラインを策定し、プログラムのシラバスを共有している。ガイドラインには、認定単位あたりの授業時間数、開講法形式、講義内容について定め、単位の相互認定の方法についても明記し、各大学の成績管理を実施する会議で単位の認定を行うしくみを確立し、運用を開始している。

日本プログラム学生は、終了後、インドネシアでの経験を生かし、就職後もインドネシアと関わる業種、もしくはインドネシアに事業所をもつ企業への就職をめざす傾向が強い。これまでに、修了したプログラム学生のうち、５名以上が、インドネシアに事業所を有する、水質浄化関連企業、真珠養殖企業、農業機械企業、不動産業などに就職して活躍している。

博士課程プログラムにおいては、平成28年度現在、３名のインドネシア学生がプログラム学生として愛媛大学連合農学研究科で研究教育指導を受けている。現在のところ、日本からプログラムに参加を希望する学生はいない。

今後のSUIJIジョイント・プログラムについては、日・イの研究者間の共同研究の促進をめざし、SUIJIコンソーシアムとして、共同研究のテーマについて共有するしくみ立ち上げることについて協議を開始した。SUIJIジョイント・プログラムに参加する学生は、共同研究を行っている両国の教員どうしの指導を受けられるように制度を整備していくことも検討している。今後は、ジョイント･ディグリーもしくはダブル・ディグリーとしてプログラムを発展させていくこと、SUIJIジョイント・プログラムに参加した学生を正規留学生として受け入れるしくみについても意見交換を続けていく。



インドネシアでの経験

愛媛大学　農学研究科生物資源学専攻　生物生産システム学コース
樋口　　武
受入れ大学：ボゴール農業大学　留学期間：平成27年８月～平成28年２月

私は平成27年８月から平成28年２月までの約６ヶ月間、SUIJI（Six-University Initiative Japan Indonesia）Joint Degree Master Programによってインドネシアに留学した。SUIJIプログラムは、日本の愛媛大学・香川大学・高知大学とインドネシアのガジャマダ大学・ボゴール農業大学・ハサヌディン大学の６大学で運営・実施する交換留学プログラムである。今回私が滞在した大学はボゴール農業大学（英名：Bogor Agricultural University、現地語名：Institut Pertanian Bogor　通称 IPB）である。

今回の留学は私にとって初めての留学かつ海外であり、それが約６ヶ月というのはかなり高いハードルであった。海外には危険な場所が多くあり、留学は私にとって不安でいっぱいであった。しかしながらインドネシアはアジア圏において中国、インドに次いで人口が多く、これからアジアにおける強国となりうるだろう。現に、多くの日本の企業もインドネシアに進出している。したがってインドネシアに留学して多くのことを学べば、自分の将来において有益になるだろうと思ったのが留学のきっかけである。

インドネシアでは授業を受けたり、自分の研究の発表を行なったりした。それらは英語で行なわれ、英語力は向上したと思う。またインドネシア人にインドネシア語の基礎を教わった。日常生活ではインドネシアの友達に助けてもらいながら様々なイベントや場所に連れて行ってもらい、インドネシアの文化を楽しんだ。インドネシアはイスラム教国家であり、生活はもちろん文化もイスラム教の影響を受けている。さらにインドネシアは多くの民族から成る多民族国家であり、各地方には各民族色がある。イスラム教と民族文化の融合は興味深く、宗教や民族らしさを感じない日本と比べると、インドネシアでの日々は非常に新鮮であり衝撃的であった。

今回の留学では、インドネシアは日本と違うことばかりで、なぜだろうと考える機会が多々あった。日本だと当たり前だったことが当たり前でない。そのたびになぜなのかを考えて、そのたびに日本についても振り返るといった機会を多く得た。日本にいた時には日本の尺度でしかものを考えられなかったが、インドネシアに行って様々なライフスタイルを目の当たりにした。日本には日本なりの考え方があるが、それに捕われるのもどうかと思うようになった。今回の留学は今後の人生において私の生き方について非常に大きな影響を与えたのは間違いない。そしてインドネシア以外の国にも興味がわき、様々なことに興味を持つ良い機会になったと思う。

この留学はSUIJIプログラムのスタッフの方々の多大な協力によって無事に終えることができた。スタッフの方々の努力は計り知れず、非常に感謝している。しかしながら投げやりな所も感じたので、インドネシアの大学に着くまでのサポートはして欲しいと感じた。

インドネシアへの留学で得られた知識や経験

香川大学大学院　農学研究科　生物資源利用学専攻　物分子化学プログラム
多鹿　正樹
受入れ大学：ボゴール農業大学　留学期間：平成27年８月～12月

私はバイオマス化学研究室に所属しており、SUIJI-JDP-Msにより平成25年の８月から12月末までボゴール農業大学に留学した。私の研究室では、試料として様々な熱帯産植物を用いており、それらを実際に見たいと考えたこと、また未利用の植物が多数ある土地に行き、未知の物質を自身で見つけ出したいと思ったことなどが留学した理由である。

現地の大学では、講義を受けながら実験を進める、という日課で過ごしていた。授業ではインドネシアの熱帯に属する国としての特徴や発展途上国としての側面を知ることができ、またそれらの内容を現地の生活で実際に見て経験できる機会も多く、より理解が深まった。プレゼンテーション主体の形式の講義や、自分の考えを述べる課題も多く、自分の考えを伝える練習になっただけでなく英語表現などの良い勉強にもなった。

現地の研究では、熱帯樹木の抗菌活性の探索を行ったが、溶媒が全く届かない、器具が足りない、ときたま水道や電気が止まる、といった日本ではまず考えられないトラブルが多く発生し、非常に苦労した。器具や設備が十分でない分、それだけ自分の実験への熱意や技術、工夫が求められていると感じ、同時に日本の実験環境の充実ぶりを痛感した。

現地ではイスラム教徒が大多数を占め、食生活はもちろんだが、生活の中でも朝5時に放送される大音量のアザーン(お祈りの時間のお知らせ)や、授業が延長したときに先生がお祈りの時間を考慮して途中で講義が中断になった経験から、宗教による根本的な生活の違いを感じた。一方、インドネシアには「ゴムの時間」という言葉があり、人が約束の時間に遅れてくることは当然であり、そのため気を揉むことが多々あった。また、学校生活に必要な事務手続きに関しても遅延や連絡ミスの問題があったため、日本とインドネシア、お互いの「普通」は捨て、互いが連絡を細部にいたるまで密にとる必要があると感じた。

最後に、インドネシアでの留学生活はすべてがスムーズに、とはいかなかったものの、両国の先生方やSUIJI推進室の方々、現地の友人たちなど、様々な人のサポートにより無事留学を終えることができた。留学先での様々なトラブルも含めて、多くの知識や経験を得ることができたことは学生生活だけでなく、これからの人生に役立っていくと思う。

最終セミナー終了後、インドネシアの友人たちと

SUIJI-JDP-Ms参加のきっかけと留学後に得られたこと

高知大学大学院　総合人間自然科学研究科　修士課程　農学専攻
石間　裕人
受入れ大学：ボゴール農業大学　留学期間：平成26年８月～平成27年８月

私がSUIJIプログラムの大学院生対象のプログラム「SJIJI-JDP（Joint Degree Program）Ms」の存在を知ったのは、学部３回生の頃です。きっかけは、興味を持っていた研究室と部活動の先輩でもある方がSUIJI-JDP-Msでボゴール農科大学に留学するという話を聞いた事でした。私はもともと海外には少し興味があり、２回生からのコース選択では国際支援学コースを選択し、４回生では東南アジアに生育するヤシを扱っている研究室に所属し研究しようと考えていました。そんな頃に聞いた先輩の話は私をとてもワクワクさせ、更にそれまで考えすら無かった海外留学への興味も芽生えさせてくれました。

最終的にSUIJI-JDP-Msに挑戦しようと決心したのは就職活動が始まる３回生の12月の直前です。私を決心させた要因は、研究も開始していないその頃の自分には就職においてアピールできるポイントが特に無かったこと、JASSOの奨学金を受給できれば留学費用の負担がほとんど無いこと、自分がこれから研究するヤシについて生育地に実際に住んで調査することで、日本にいるよりも確実に多くの知識を吸収できると確信したこと等、沢山挙げることができます。その中で最も大きな要因は、インドネシアという東南アジア最大の人口を抱え、日本では馴染みが無い上に少しネガティブな印象のあるイスラム教の国で学べることでした。これらの要因から、留学することによるメリットのほうがデメリットに勝ると判断し、大学院入学と留学に進路を決めました。

ボゴール農科大学での１年間の留学期間中は様々なことを体と頭で体験し、学ぶことが出来ました。研究面では、研究対象であるヤシの生育地で、実際に収穫し、どのように利用され、どの程度地域の生活に根付いているのかを学ぶことができました。また、貴重なヤシのサンプルや情報を得られたことにより、未だ乏しいヤシの研究データと私の修士論文の内容の充実をはかることができました。

生活面では、様々な国や地域から学生が集うインドネシアの大学ならではの多民族と多宗教という日本ではほとんど経験することが出来ない状況に身を置けたことで、大きく違う価値観を持った人とのコミュニケーションや注意すべきポイント等を感覚的に学びました。加えて、日本では昨今のイスラム過激派によるテロ事件でイスラム教全てが日本を含めた先進国の敵であるかのように報道がなされ、私自身も少なからずそう感じてはいました。しかし、イスラム教最大の祭典であるレバランを含む１カ月間を友人の故郷であるプルウォコルトという田舎町で過ごすことによって、インドネシアの多くのイスラム教徒の方々は異文化にとても寛容であり、過激派については「彼らをイスラム教徒とは認めない。我々を勘違いしないでくれ。」という意見を持っていることがわかってきました。

私がSUIJI-JDP-Msで得た最も大きな成果の一つは、このイスラム教に対するイメージの変化です。互いの文化や習慣を理解し、受け入れる経験を得たことで、多文化共生への理解が醸成され、真のグローバル人材へと成長する礎が築けたと思いますし、卒業後に就く事になっている海外での仕事においてもどこかで必ず活かしていけると考えています。

レバランの朝の子供達

Message from SUIJI-JDP-Ms Alumni

Lecturer in Universitas Gadjah Mada
Sri Wijanarti
Host University：Ehime University　Period of study in Japan：2014/3 to 2015/2

Hi, my name is Sri Wijanarti, a SUIJI-JDP alumni from Universitas Gadjah Mada, Indonesia. I graduated in October 2015 for Master Program in Food Science and Technology and now I work as a young lecturer in Universitas Gadjah Mada. It was a good and amazing experience for me spending two semesters in Ehime University during exchange program. I experienced and learnt different culture. Japan taught me two valueable things that changed me : discipline and hard work.

It was difficult in the beginning because I did not speak Japanese. But then, I met a lot of friends that helped me to improve my Japanese. We exchanged our languanges, they taught me Japanese and I thought them English. It was a great experience for me because I got many new friends from Japan, China, India, even Mexico, and on the other hand, my Japanese was improved. And we still communicate until now.

A year was very short time. I enjoyed my time in Japan because there were many interesting things to do, such as hanami in the spring, performing Indonesian traditional dance in summer festivals, planting and harvesting rice in university ricefield, outing with friends in summer, sightseeing to Kyoto in the autumn, and skiing in the winter. Of course, I also did experiment and thanks to my supervisor's guidance, we published a paper in the end of the year. Thank you so much to SUIJI Program for giving a precious chance to me to see the other side of the world, met new friends, and learnt a lot of new things!

Messege from SUIJI-JDP-Ms Alumni

Bogor Agricultural University
Rusdah
Host University:Kagawa University
Period of study in Japan:2015/3 to 2016/2

"Ohayou gozaimasu!"

Thats my first words in the beginning of my study abroad in Kagawa University, Japan as SUIJI Joint Degree master program class. I was absolutely zero on Japanesse languange and just learn a really basic Japanesse fastly before flying to Osaka. I came to Japan on March 10, 2015 at the end of winter session and come back to Indonesia on February 26, 2016. I graduated from my home university (Bogor Agricultural University/IPB) in September 2016 for master program in Food Science.

I am really grateful to become one of SUIJI-JDP students and got a wealth of experience. SUIJI Joint Degree program not only offer an opportunity to complete my master degree study under two supervisor at home university and host university (Kagawa University) but also I througly got so much good moments and research experience during the program. High standard of academic culture, got an inspirational lecturer and a really enthusiastic lab mate make my every single day at Kagawa so meaningfull. The laboratorium and department become a place to study and a fantastic environment to meet friends and lecturer who really care to share knowledge and experience. Here, final test score is not the main purpose of study, but understanding and find something new in science is more considered. That's why in every class I attend, lecturers come and interact with the class closely and bring the real fact of science to the table, make students understand more about the subject they study.

SUIJI-JDP not only talk about research and classroom learning, further we got several activity to learn firsthand about environment issues, food industries, also social activity in special Japanesse community (Kochi and Ehime). The good both management and supervisor during the program make every special subject consistenly can open my mind (education and culture), increase my knowledge and confidence.

I am start working on a book about education and science for pregnant woman, inspired by Japanesse culture called Kyoiku mama and Ryousai kenbo. Thank you for IPB, Kagawa University, JASSO, and all people including this great program!

Otsukaresama desu.

The Experience as SUIJI-JDP-Ms Student

Expert assistant of PETUAH Smart Landuse Management(SALUT),
Hasanuddin University
Andi Nurul Mukhlisa, M.Hut
Host University：Ehime University　Period of study in Japan：2015/3 to 2015/10

Study abroad experience significantly impacted my life, precisely as member of Six-University Initiative Japan Indonesia SUIJI Joint Degree Master Program (JDP-Ms). Ehime university was my host university for 8 months from March to October 2015. SUIJI-JDP-Ms has the obligation to take courses at the host university even though our home university has enough credit courses. Beside special subject which is visited two other host universities of SUIJI (Kochi University and Kagawa University), I took three others, which I considered and feel a private lecture because the two subject has only one students, that is me. In this class, we discussed several topics and share information about the condition of forests in our countries. One of the three subject was an international class. In this class, the lecturer was very inspiring about sustainable agriculture, so I got a lot of new knowledge. SUIJI-JDP-Ms also gives me the opportunity to attend seminars Japanese students and international students in Japan as well as being one of the seminarians which attended by some foreign students. This environment taught me how to shape my own world by interacting with the student from several countries. For everyday living, not difficult, to adapt because, that was my second program with SUIJI. In 2011 SUIJI also chose me to follow KKN International program which now namely SUIJI Service Learning Program (SLP) for 3 months from October to December.

Experiences in SUIJI-JDP-Ms and SUIJI-SLP was one of the reasons I am accepted to work for a program called Smart Land Use Management (SALUT) under Hasanuddin University in cooperation with the Millennium Challenge Corporation (MCC), which is handled by Indonesia Millennium Challenge Account (MCA-I). SALUT is institution who collect the green knowledge. Focus location of the institution in Sulawesi, especially West Sulawesi. Furthermore, I also handle some of the spatial analysis of forestry from several government agencies that Needed.

Special thanks to Prof. Nakayasu Akira as my supervisor at Ehime University, Makkarennu, S.Hut, M.Si, Ph.D as my supervisor at Hasanuddin University, Kobayashi Osamu and Shimagami Motoko as SUIJI Coordinator at Ehime University, Prof. Osozawa Katsuya as one of SUIJI founder , Prof. Agnes Rampisela and Prof. Musrizal Muin as SUIJI Coordinator at Hasanuddin University, Prof. Hiroki Kasamatsu, Prof. Hu Bai as lecturer at Ehime University and all of people who has responsibility for SUIJI Program.

インドネシア研究留学に伴う学生の成長

愛媛大学大学院　農学研究科　生物環境学専攻
環境保全学コース　環境産業応用化学　教授　松枝　直人

環境産業応用化学（旧環境土壌学）研究室がSUIJI-JDP-Msで派遣した学生は４人にのぼる。インドネシアのSUIJIコンソーシアム構成大学からの留学生４人が博士の学位を取得し、うち２人がそのまま当研究室の職員として勤務した関係上、インドネシアの大学との繋がりは深い。それゆえ学生も、インドネシアの大学で修士論文の研究の一部を行ってみたい、との意欲をもって臨んだようである。

派遣した学生は、必ずしも積極的な性格の持ち主ではなかった。むしろ引っ込み思案な学生が多かったが、インドネシアから帰ってくると、生き生きとした表情となり、研究打ち合わせやゼミなどでも積極的に質疑応答できるよう変貌していたことが印象に残っている。本学では難しくはなかった履修登録も、インドネシアでは科目の選択から担当教員への連絡までかなりの量の作業を英語で行う必要があり、講義も英語なので、英語の習得はもちろんのこと積極性も身に付けざるを得ない状況にあったといえる。履修した科目も、本学の所属コースのものと比較して、より基礎的な内容や、周辺分野の内容のものであり、そのような科目を学べることは、修士論文研究の遂行にとっても有意義であった。

ジャワ島の料理は日本の味付けに近く人々も柔和だが、トイレや飲料水などの衛生環境は日本とは異なる。大学での講義や研究に加え、学外で異文化に接したことも、彼らを成長させたようである。日本学生の「国際化」は、SUIJI-JDPのような留学が契機となることが多い。

海外への視点を拓く契機と後押し

愛媛大学大学院　農学研究科　食料生産学専攻
農業生産学コース　土壌肥料学　准教授　当真　　要

インドネシア留学生の研究に関してはできるだけ本人の希望をくみ取ることを心掛けていたが、予算の制約上どうしても既存の研究テーマの中で実施してもらう必要があった。幸いにも受入のマッチングで研究テーマの合う学生を受け入れることができた。しかしながら、調査の方法については日本人の院生が学部生に伝えるようにはできなかったため、全てを指導する必要があったという点で日本学生を指導するよりも負担が大きかったと感じた。調査・研究についてはインドネシア学生がより真剣に取り組んでおり、その姿勢は日本学生に大いに影響したと思われる。

インドネシア学生が研究室に加わることで研究室内での英会話の機会が増えたが、それは単に必要な会話を英語で交わすということ以上の効果があった。初期の会話の中で、日本学生にとっては思っていた以上に日本の文化がインドネシアに浸透していたと感じていた。特にアニメや楽曲など文化的コンテンツから会話が盛り上がることが多く、このことが英語コミュニケーションの垣根をより低くしていた。コミュニケーションを良く取っていた日本学生はインドネシアに興味を持つようになり、修士課程のSUIJI-JP-MsでIPBやUGMへの渡航を決めた学生がでてきた。これまでに海外に興味の及ばなかった学生にとっては新しい世界を知るきっかけとなったと思われる。

宗教に関することについて受入時に最も配慮した。研究室に在籍する日本学生にとってはこれまでにイスラム教との接点がなく、来日直後に日本学生へ正確に伝える必要があった。特に食事については来日後、日を置かずに研究室内で歓迎会を設け、食事の準備の中で注意点について実習形式で確認していたことが、日本学生に宗教についてよく理解できることになったかと思う。それ以降、全てのケースにおいて宗教関係でもめることもなく、日本学生も積極的にインドネシア学生へ確認するような姿勢が見られた。

SUIJI-JDP-Ms派遣学生の指導教員としての振り返り

香川大学農学部　教授（バイオマス化学研究室）　片山　健至

本研究室からJDP-Ms派遣留学生として2013～15年度に、３名のＭ１が８～12月にIPBにお世話になった。12年度のSLP試行（２週間）にもＭ２と４年生が１名ずつ参加した。筆者としては、インドネシアとのJSPSプログラム（2001～05年）に参加したこと及びIPBと本学部との学術交流協定に基づき、IPB教員との共同研究及び留学生の受入れ等の交流を重ねたため、ホストに恵まれて本派遣留学に至ったと思う。このMsの４人は、本研究室所属時から留学の希望があったわけではなく、研究室にて実験を重ねて自己を高めるタイプだった。JDP開始時に、「君どうですか、きっと貴重な体験となりますよ」と薦めたところ、応じてくれた。彼らは、東南アジアは森林バイオマスの宝庫であり、研究室の試料もインドネシア産であると認識し、東南アジアへの興味は深かった。2012年からIPBとUNHASの留学生２名も同室になった。本JDPが、彼らのような潜在的な留学希望者の背中を軽く押した結果、派遣学生を増やした効果は大きい。留学とは「欧米で、まず英語だ」という常識に囚われず、彼らは東南アジアに飛び込み、優秀な学生と学術・文化交流を行った結果、「やはり一層の発展には英語が必要」との認識を持って、帰国後の研究・交流に励んだ。彼らはインドネシアに限らず多くの留学生の学習と日常生活を気にかけて、英語でコミュニケーションをとるようになった。皆、同国に一層興味を持つようになり、T君はそこに関連会社を持つ木材加工会社に就職し、Y君は同国の環境問題の重要性を認識して環境サービス会社に就職した。

SUIJI-JP-Ms学生を受け入れて感じたこと

香川大学　農学部　教授　小川　雅廣

２名のSUIJI-JP-Ms学生を受け入れた。マッチングの段階で研究テーマが先方から提示されたが、研究計画は提案されなかった。渡日後に留学生と話し合い研究計画を立てた。研究計画を立ててわかったことは、留学生の研究目的が明確ではないこと、文献検索が十分に行われていないことであった。よって、留学生への指導は文献検索を入念にさせてから研究目的を設定させ研究計画を立てさせた。インドネシア留学生はかなり豊富な知識を持っていたが、研究目的の理解が不足していると感じた。また、派遣元の指導教員と受入先の指導教員（私）には面識がなく渡日までに一度もメール交信も行われなかった。これは問題と思う。インドネシア留学生の性格は、礼儀正しく、教員の指導に素直に従う姿勢は感じられるが、主体性に欠けると感じた。

実験に関しては、留学生がしたい実験が私の研究室に測定機器がなく実施できないことがあって失望させてしまった。失望させないためにも、事前に３者（留学生及び派遣元と受入先の指導教員）で研究計画を話し合っておくべきである。

生活に関しては、日本学生が宗教上の習慣に配慮してサポートした。また、実験器具の使い方や実験操作を留学生に英語で教えた。これらの活動を通じて、日本人学生は積極的に英語でコミュニケーションをとるようになり、相手に配慮した考え方ができるようになるなど、日本学生に好影響を与えた。上述の交流を通じて、複数の日本学生がインドネシアの文化や習慣に興味を持つようになった。それがきっかけとなり２名の日本学生がインドネシアに半年間留学した。

SUIJI－JDP MSにおける インドネシア学生を受け入れて

高知大学　農林海洋科学部　益本　俊郎

当研究室では平成27年度に１名のインドネシア留学生を受け入れた。すでに３名の留学生がいたため、セミナーで使う資料作成や、日常会話も英語でしており、今回の学生受け入れに際し、研究室の日本学生にとって、特に何かが変わったということはなかった。受け入れたインドネシア留学生は女性で、平均的な日本学生に較べると探究心が旺盛で積極性があった。もともと日本語や日本文化に興味があり、明るい性格だったので、自然に我々の中にとけ込んできた。一緒に草サッカーをしたり渓流で泳いだりして生活を楽しんでいた。また責任感の強さも感じとれた。必要と考えれば夜中にまで水質調査のサンプリングに出かけていた。これらは国民性というよりむしろ、この学生が少なからず社会経験をしてきた個人的な背景やインドネシアの教育が関係しているのではないかと思った。

今回受け入れた学生のみならず、SUIJI-MSで接した他大学のインドネシア学生も質問をよくするし、しゃべりかけてくる。インドネシア学生の話によると、ボゴール農科大学では試験や評価の場面において、教員から質問されそれに答えるといった機会が多くあるようだ。修士の最終試験で数時間かけて口頭試問というのもその一例だろう。普段から質問され、それに論理的に答える訓練を受けている中から“質問力”が備わったのかもしれない。日本学生の傾向としてあまり質問をしない。それは質問される機会が少ないからで、教員の責任でもあると感じた。

研究の進め方に関してだが、当初、学生から送られて来た研究テーマは、当方の研究分野と一致していたため、受け入れに何ら問題は無いと判断できた。また、学生が送ってきた研究計画は文献調査に基づいて背景から目的まで論理的に書かれ、内容としては申し分が無く学生の能力の高さを感じた。しかしながら、学生自身には実験の経験が殆ど無いためこのまま実験を開始すると様々な困難が予想され、かつ日本で入手不可能な試料を使う実験だったので、当方で準備するテーマで実験することを提案し、同意して来日した。

来日後、実験データがうまく出るように予備試験をしながら実験を進めていき、得られた結果をもとに研究計画を立てた。後日聞いたことだが、このように、実験をやりながら研究の方向性を決める、というやり方に、学生はかなり戸惑ったようだ。学生にとって一旦立てた行動計画は、変える事はできないとインドネシアで指導されたからだと思う。しかしながら帰国する頃には、予備実験をしながら進める事で、実際に実験をしながら技術の修得ができることや、柔軟に考えを変えられることができることがわかり、インドネシアでも将来このようなやり方を取り入れて研究をすすめたいと、認識を新たにして帰国した。

日本で実施する研究内容についての当方の理解は、修士論文関連のテーマであればよく、優れた結果がでれば修士論文の中に書き加える、といった程度の認識だった。しかしボゴール農科大学では、修士の最終試験を受けるためには、国際的な学術雑誌に投稿することが必要条件で（以前は受理されることだったようで、そのため修了待ちの学生がかなりいたそうだ。）論文投稿に値する研究成果が求められている事が、実験の取りまとめ段階になって初めてわかった。幸運なことにうまくデータが出て、彼女の努力により帰国後数ヶ月で修士論文と投稿論文を仕上げ、最終試験を無事修了したが、もしこのように論文投稿が求められていたならば、受け入れていたかどうか疑問である。

また、修士論文に記載する内容は、学生が所属する研究分野内で完結されることが比較的厳格に求められるように感じた。彼女の研究テーマは、研究の独創性を出すため分野横断的な内容にした。価値ある結果が導き出されたのだが、その目玉と言うべき内容は、所属研究室の分野内容と合致していないとの理由で、インドネシアの指導教員から削除を求められたそうだ。したがって、研究テーマの設定はあまり自由にはできず、日本で実際に研究を開始した後も、受け入れ教員はインドネシア学生を介して指導教員と研究の方向性について良く擦り合わせをしておく必要があるのかもしれない。

The Benefit of Participating the SUIJI Program for Student

Associate Professor and Head of Soil Chemistry and Fertility Laboratory
Faculty of Agriculture, Gadjah Mada University
Eko Hanudin, Ph.D

The student obtained the new experiences in environment, culture, climate, food, religion as something different from Japan. From classes, the student got new knowledge and stimulation. And in SUIJI JDP program, the student can do experiment in parallel with class. The student likes to learn Indonesian agriculture, especially in rice cultivation. The student is doing experiment regarding nitrogen mineralization from two manures on rice cultivation. It is useful for deeper understanding N supply for organic rice cultivation. Also, the student can feel “Indonesia” by touching soils and crops in Indonesia. The student meet Indonesian students who interested in Japan. Each understanding and interesting between Indonesian and Japanese students will expand and tighten friendship between nations in the future. The student also may face to some hardships during studying in Indonesia. These experiences gave the student a broad perspectives and resilient. By following the SUIJI JDP program the student obtained many chances to learn, feel and think something what it could not get in Japan.

Photo：Pot experiment conducted by Rena Iwamoto under supervisor Eko Hanudin.

Messege from SUIJI-JDP-Ms Lecturer

Head of Inorganic Chemistry Laboratory
Department of Chemistry,
Faculty of Mathematics and Natural Sciences,
Bogor Agricultural University
Sri Sugiarti, Ph.D

Since the launching of SUIJI JDP program in 2011, I got the opportunity to supervise 4 students from Ehime University on their preliminary research and taught them bioinorganic class. I found there is no major problem that the students experienced during their stay in Indonesia. I witness some accomplishment done by the students in several aspects of their life. One student, who was very shy at the beginning of the program, gained lots of confidence by the time the program is ended. She even eager to live outside the dormitory to gain more perspective about the Indonesian way of living. An example of a success story of the program. Another success story is about one student who become fluent and communicate confidently in English. I believe that the students who are willing to leave their home country to experience life which is very different to what they have at home, are the students who are ready to face life in the future and ready to be a good citizen of global society.

This program is an excellence example of a joint degree program because the students involve in the program are coming from both countries. Therefore, there is an opportunity to share some "home country" wisdoms between the students. Students in Japan can learn some cultural, ethical, regulation to some extent, and way of living in Indonesia. They can also learn on some similarities between two countries, especially for students studying soil chemistry, they can identify the similarities on the type and characteristic of minerals in Indonesia and in Japan. By studying the mineral in Indonesia, and compare it with similar type of minerals in Japan, the students can give a thorough answer to a particular problem that they are trying to solve.

Finally, I am hoping that this program will remain offered for years to come. So that many more students will experience the benefits of mingling with their peer from different nationality and ways of life.

Nurturing Student's Capability through SUIJI-JDP

Head of Plant Disease Laboratory
Faculty of Agriculture, Hasanuddin University
Prof. Dr Ade Rosmana

It is with great pleasure that I write this letter of testimonial for Mr. Andi Akbar Hakkar. Mr Andi Akbar has been my student for almost two years at Master Program, Faculty of Agriculture, Hasanuddin University. In addition, he has followed SUIJI-JDP Program under supervisor of Prof. Dr Kazuya Akimitsu at Kagawa University for eight months from March 2015 until October 2015. During this period in Japan, he became very capable in work on molecular aspect of plant and microbes interaction and surprisingly he speaks english fluently. With this experience from Japan, he could complete his research and his study at Hasanuddin University with great success. I have found Mr Andi. Akbar Hakkar to be uniquely resourceful and adaptive. Therefore, I have found also SUIJI-JDP Program is very useful and needs to be continued.